

教育実習における日誌の指導について（１）

－エピソード記録の指導－

石 川 清 明

（國學院大學幼児教育専門学校）

〔はじめに〕

教育実習では、学生が課題意識を持ち主体的に学ぶ姿勢が重視され、指導内容は、保育実践、実習日誌、指導計画、指導案など多岐にわたっている。しかもその指導は幼稚園現場で日々の保育にあたっている幼稚園教諭から直接指導を受けるという特性を持っている。養成校では、教育実習の事前ならびに事後指導がなされるのみで、教育実習期間中に実習生に対して系統的な指導を行う機会は殆どないといえる。

しかし、本校で行っている「通年教育実習」すなわち年間を通して教育実習を行う場合は、教育実習期間中に養成校の教員が実習生に対して、子どもとのかかわりなど即時的な指導を除き、保育現場と十分な意志の疎通を図り連携しながら指導することが可能である。学生一人一人の関心や「学び」に見られる特徴、保育者としての成長の様子や課題に応じて、指導に時間をかけることができる。さらに、指導計画の立案や指導案の作成に対する指導が比較的短期間であるのに比べ、教育実習日誌の指導は教育実習の全期間に亘り指導が必要とされ、「通年教育実習」では実習日誌の指導が重要な意味を持っている。^{1) 2)}

本報告では、実習生が教育実習で体験し学んだ内容が記載されている教育実習日誌をとりあげ、特に、平成１２年度開始の教育実習から、教育実習日誌の体裁が変更されたことに連動して新たに導入された「エピソード記録」（図１．参照）に焦点を当て、実習日誌について指導を行う際の示唆を得ようと考えた。

エピソード記録：	学内での学び：
（ 途中省略 ）	
助言：	助言：
國學院大學幼児教育専門学校（ ）	

図１．「エピソード記録」用紙（Ａ４版）

〔目的〕

実習日誌の一書式である「エピソード記録」には、実習生の「学び」がどのようなかたちで記述されているのかを明らかにする。

〔方法〕

１．対象

平成１２年度に教育実習を開始した女子学生のうち著者が「保育内容演習」の授業を担当した学生１５名を対象とした。なお、平成１２年度の「保育内容演習」は、教育実習と連動した科目として教育実習が開始される１年次後期に、４名の教員がそれぞれ１５名前後の学生を１グループとして、１週につき９０分の授業で構成されている。

２．教育実習の期間及び評価

「通年教育実習」は１年次１０月から２年次７月まで、約４０日間に亘り毎週１日（火曜日）に実習園で実習を行うものである。さらに、実習開始時の１０月と１年次終了時の２月にそれぞれ５日間の連続実習を、２年次６月に２週間の連続実習を行い、その後、「発展実習」と呼ぶ、これまでに通った実習園以外の実習園で２日間の実習を行う日程をとっている。

本報告では、実習開始当初、約１ヶ月後にあたる１０月末、２ヶ月後にあたる１１月末に課した計３回の「エピソード記録」に記述された内容を評価・分析の対象とした。なお、エピソード記録を記述するにあたり、エピソード記録の意義をはじめ、観察の仕方、記録の取り方、まとめ方、等について資料を配付し共通の理解を図った。また、実習生はそれぞれ異なった幼稚園で実習をしており、共通した観察課題を提示する事が出来ないのでテーマや記述内容に制限を設けず自由記述とした。

〔結果ならびに考察〕

１．エピソード記録に記述された保育場面

エピソードとして記述された保育場面を各回ごとに整理し表１．に示した。各回とも「遊び」と「製作」の場面を取り上げていた。これらは、保育観察に重点が置かれている実習の初期でも直接子どもとのかかわる事が出来、関心を持ちやすい場面であったと考えられた。１回目に観察された事象を半日あるいは１日の

表 1. 記述された保育場面 間、経時的に

保育場面 \ 回	第 1 回	第 2 回	第 3 回	羅列した者が
登 園	1	2	1	3 名みられた が、記録に対 する理解が不 十分でテーマ を絞れなかつ た為と考えら れた。また、 次第に「その 他」が増加した
遊 び	7	6	4	
製 作	3	4	2	
昼 食	1			
降 園		1		
その他		2	8	
午前中の保育	2			
1 日の保育	1			

(数字は人数：表 2 以降も同じ) 他」が増加したが、視点の拡大を反映したものと考えられた。

2. エピソード記録に記述された「子ども」の表記

前述の「子どもとのかかわり」は表 2. に示したようにエピソードに記述された「子ども」を示す表記の変化としても捉えられていた。すなわち、当初「子どもたち」「男

表 2. 「子ども」の表記 もたち」「男

表 記 \ 回	第 1 回	第 2 回	第 3 回	の子・女の
子どもたち	5	4	2	子」と記述
男の子・女の子	5	1	1	の対象を広
～する子	3	2	5	く捉えてい
A 君・B ちゃん	2	8	7	たものが次

第に対象を特定する具体的な表記へと変化していた。

3. エピソード記録に記述された「ことば」

エピソード記録の記述に子どもや担任教諭あるいは実習生の「ことば」が具体的に記述されているかどうかを表 3. に示した。子どもや実習生の「ことば」は記述されていたが、担任教諭の「ことば」の記述は少なく、エピソード記録は、子どもと実習生とのかかわりを中心として記述され、担任教諭の保育にまで関心が、まだ広がっていないことが推測された。次に、かかわりがことばのやりとりとして記述されているかどうかを集計したところ、第 1 回目ではやりとりの記載は 3 名 (20.0%) のみであったのに対して第 2 回目 10 名 (66.7%)、第 3 回目 12 名 (80.0%) と増加していた。

表 3. 「ことば」の記述の有無

対 象 \ 回	第 1 回		第 2 回		第 3 回	
記 述 の 有 無	有	無	有	無	有	無
子 ども	8	7	1 1	4	1 1	4
担 任 教 諭	1	1 4	2	1 3	0	1 5
実 習 生	6	9	8	7	1 0	5

4. エピソード記録に記述された「内容」

エピソード記録の記述内容を整理し表 4. に示した。「遊びの様子」から「子どもとのかかわり」さらに「喧嘩・ルール」「危険な行為 (はさみを持って友達

表 4. 記述の内容

内 容 \ 回	第 1 回	第 2 回	第 3 回
遊びの様子	8	1	
個人差・年齢差・性差	3		3
発展・援助		3	1
子どもとのかかわり	3	5	2
ことばかけ		1	1
喧嘩・ルール		3	2
危険な行為			2
障害児		1	2
担任教諭の保育観察	1	1	
環境構成			2

を追いかけた)」「障害児とのかかわり」など具体的な内容が取り上げられ、保育者としてどの様に子どもとのかかわったらよいのか対処に戸惑った経験が記述されるなど、かかわりが徐々に深まっている様子が窺えた。また、このような経験が保育者の行動に関心を向けるきっかけの一つになっていると思われ、学内における保育内容演習等の授業で、子どもと実習生とのかかわりから子どもと保育者とのかかわりへと視点の転換を促す指導の時期を示唆しているものと考えられた。[まとめ]

本校の女子学生 15 名を対象に、実習日誌の一書式である「エピソード記録」をとりあげ教育実習初期の記述内容について検討を加え、次のような知見を得た。①記述された保育の場面は「遊び」「製作」を中心としたものから視点の拡がりに伴い次第に多様なものへと変化していた。②子どもの表記は、「子どもたち」「男の子・女の子」といった幅広い表現から「～する子」「A 君・B ちゃん」と対象を特定する表現へと変化していた。③子どもと実習生とのかかわりの様子が次第に具体的に記述される様に変化していた。④記述内容は遊びの様子、個人差、年齢差など観察により得られたものから、子どもとのかかわりやそこで経験した戸惑いへと変化していた。⑤担任教諭の保育に関心が示されるのは実習開始二ヶ月以降であることが示された。⑥エピソード記録の記述から、実習生の「学び」の過程の一端が明らかとなり、実習日誌を通した実習指導の方向性について手がかりが得られた。

《文献》

- 1) 石川清明、教育実習日誌の指導について、國學院大學幼児教育専門学校紀要《第 13 輯》37-42、1999
- 2) 石川清明、長期教育実習の特質 (1) - 1 年次における通年教育実習の進め方から -、國學院大學幼児教育専門学校紀要《第 14 輯》27-33、2000